

2019 年度立命館附属校 教師塾VI

～授業力の向上～

附属校教育研究・研修センター

10月15日（火）朱雀キャンパスにおいて、附属校教育研究・研修センター主催の教師塾VIを実施した。

立命館宇治中学校・高等学校マイスター・ティーチャー渡辺 儀輝先生を講師にお迎えし、「失敗の記録のススメ」と題して講演いただいた。

参加者は、15人（立命館小学校2人、立命館中高2人、立命館宇治中高2人、立命館慶祥中高3人、立命館守山中高6人）であった。

《研修の概要》

1、渡辺先生の経歴など

北海道公立高等学校教諭として22年間勤務し、2013年4月より立命館宇治中学校・高等学校に勤務している。

初任時4年間は、課題が山積する学校に勤務し、当初は理科でなく数学を教えていた。4年目に初めて物理を担当したが、受講した生徒はたった9人で、なかなか授業に積極的に取り組めない生徒だった。しかし、「よしやるぞ。」と思い、130時間、全て実験をした。その記録を物理サークルに「9人の侍」としてずっと掲載した。実験道具は学校に泊り込んだり、近隣の工場で加工してもらったりして作った。当時、札幌で物理サークルの先生から様々な実験器具を教えてもらったり、議論したりした。この4年間で私の理科教育の全ての礎となっている。その後全校生徒100人の海辺の高校や大学、進学校などを経験した。



現在も多忙を極めていますが、今の自分を支えているのは初めて指導した9人の生徒ではないだろうかと思う。

だからこそ、先生方に「自身の未来を支えるのは目の前にいる今の生徒である」という事を言いたい。教員という職種にこだわる必要はないが、今のフレッシュなこの時期・時間を大事にして欲しい。

2、参加者の現在の今の悩みの共有化

回答はできないかもしれないが、悩みを共有化することは大事なので出し合ひましょう。

参加者の悩み（抜粋）

- ・瞬間的な答えは返ってくるが、生徒にイメージが伝わらない。探究的な動きまでに至らない。
- ・生徒が主体的に学ぶ授業や本当に楽しい授業をしたいと思うがなかなか実施できない。
- ・学力の開きのある生徒の指導法について模索している。
- ・支援が必要な生徒の対応と保護者、先生、本人のニーズのサポートの方法などを考えないが、時間の確保が難しい。
- ・今まで高校生しか指導していなかったので、初めての中学生の接し方を模索している。
- ・探求型の授業を進めていく中で評価規準や教科の基礎・基本をどのように身につけられる方法を悩んでいる。

いろいろなお話いただきありがとうございます。まずお話ししたいのは、確認したいのは皆さんは現在、健康ですかということです。お話いただいた悩みはこれから皆さんが人のネットワークを活用したり、研究会や勉強会に参加したりして力をつけることで何十年か経ったら解決できる

のではないのでしょうか。

ただし、これからの学校の局面は皆さんが受けてきたものとは大きく異なる。人口が減少することは日本を大きく変えていく。様々な国から人々が日本に居住し、立命館でも複数の言語でコミュニケーションを取る必要が出てくるかも知れない。先生方が多様な価値観のある生徒にどのように対応し、ぶれずに人生観を持って接していくか、人間性が試される毎日がやってくる。

今、先生方はいろいろなところで学べる時代になったが、生徒も同じである。YouTubeの授業の方が分かりやすいものがある。生徒も選べる時代である。授業だけでなく、大学進学の間も多様化している。ダイバーシティー化していく時代に今日来ている皆さんは、これにどう立ち向かっていくのかを考えて欲しい。

3、立命館附属校生の特徴

- ・附属校生は経済的に恵まれ、様々な経験を持っている生徒が多い。
- ・現在、2人に1人が大学進学する時代になり、大学生は62万人いる。国公立の定員は10万人に過ぎないが、60万人強がセンター試験を受検している。ただ、内部進学の間がある附属校生の受検率は低くなっている。
- ・附属校は素晴らしい施設設備を使い、潤沢な教科予算で、海外研修も実施している。センター試験に振り回されることが少ない環境で授業が展開できる。
- ・附属校生に付けさせたい学力は、センター学力なのかを考えてほしい。

4、生徒に、先生に身につけて欲しい力

バカロレアの物理の教科者はまず読み解くことから始まる。生徒たちはひたすら読み解く。そして、各チャプターの最初には目当てが記載され、このチャプターを学んだらこういうことができないといけないと記載されている。

渡辺先生は物理の授業でSQ4R (Survey, Question, Read, Recite, Review, Reflect) の手法を利用している。週に1度、ひたすら教科書を読む授業をしている。

今、生徒はツイートはできるが長文を読みこなせない、長文をしっかりと読めるようなことが必要であり、書籍などを通して知識を習得することは大事である。次に大事なのがライティングである。パラグラフライティングという手法があり、阪大でも学びの基礎・基本として1年生の授業に取り入れられている。そして、先生の言うことは本当に正しいのかと批判的に聴くこと、さらにコミュニケーションつまり対話が重要である、他者の価値観に気付き、意見を聴き取る。そのためにはホワイトボード、ラウンジが必要になる。

読む、書く、聴く、話すという4技能は英語に限った話ではない。立命館の生徒にはこの4技能をきちんと身につけて卒業させるべきであると思う。渡辺先生の教え子である附属生が素晴らしい活躍をしていることをお話いただいた。

皆さんの指導している生徒をセンター試験のものさしで測っていいのだろうか？読む、書く、聴く、話すというスキルトレーニングを各教科で実施すると思考が膨らんでいく。スキルトレーニングが身につけていない場合は、プランAがダメなときにプランBが出せない人間になるのではないだろうか。

皆さんにも失敗の経験はあるだろうか。しかし、失敗の記憶は時間とともに薄れる。だから失敗の記録を取って欲しい。特に安全、安心の記録が大切である。その記録がすぐに役立つものでもないかもしれない。例えば、先生方の発言が人を傷つけた記録も取って欲しい。4技能を身につけ、失敗の記録を取ると先生方は大きな力を身につけることができるようになってくる。

《実験》

空き缶(350ml)に水100mlを入れたら、斜めに缶が立つ。水が0でも350mlでも立たない。今までの授業なら原理を説明して、覚えた知識をテストで再現して終わりであった。しかし、注

ぐ水の量や缶の形状を変えたらどうなるのだと生徒の興味を引き出し膨らませるのがいい授業ではないか。

今なんでも答えが出る。生徒には仮説を立て、法則性を発見し、推測し確認できる力を養って欲しい。この科学的手法は、文系・理系の範疇にとらわれず活用できる手法である。

立命館附属校生は学ぶための4技能は身に付けられる条件がある。いろいろな刺激を与え、プランAがダメならプランBを出せる人に育てて欲しい。進学指導をするなら、グローバルな進学指導をしてほしい、オックスフォードを目指そう。それとも何か世界一、日本一を生徒の育てて欲しい。1人1人の力を伸ばして欲しい。



(記録 立命館守山中高 山村 和恵)

(編集 附属校教育研究・研修センター 羽田 澄)